

# 夢喰行脚

mameko1843

## グラリと傾いたのは世界？

---

「水瀬様のお宅ですか？突然のご訪問、失礼いたします。」

「...あ、ああ、うん？」

寝ぼけた頭でドア開けたらそんなこと言われた。

私、株式会社アンミンと申します。お休みのところ、突然のご訪問申し訳ありません。これ、名刺です。私情で申し訳ないんですが、資金が切迫しておりまして、新しい名刺を作ることが出来なかったもので、事務所が移転する前の名刺なんですけど、其処は気にしないで頂ければと思います。私の携帯は何時もこの番号で通じますので。ですが私、恥ずかしながら電話しかできませんのでEメールアドレスは掲載しておりません。なぜ電話しかしないのに携帯を持っているのかと申しますと、いえ、まあビジネス上持っていた方が色々便利であることと、特定の連絡の付く番号がある方が、お客様にも信頼していただけるかなと思いましたが、あまりといいですか、全く使用しておりませんので、本当に電話が無理なのでメールアドレス教えて下さいとか、赤外線で送ってください、とか、そういう高度な技術はできないんです、申し訳ありません。でも絶対電話だけは通じるんで。便利ですよ、ボタン一つ押したらお客様とお話しができるんですから。話は戻るんですけども、まあお客様の意志をお伺いに此方にお伺いしたわけでして、やはり私の事も知って置いて頂きたいと思ひまして、名刺をお渡ししております。決して単純な押し売り訪問などではございませんので、ご了承頂きたく...

状況すら良く理解できてない俺に、その男はどうでもいいことをべらべら喋って、（それに、だんだん敬語がおかしくなってきた喋り方）喋った後に俺に差し出したのは、若干変色して黄ばみがあった、長方形の小さなソレだった。俺が若干躊躇いつつもそれを見ると、男はにっこりと笑って会釈をした。なんでこんなところにこんな男がいるんだよ。誰かにそう問いただきたい気分を喉の奥まで呑み込んで、俺はもう一度目の前の男を見た。なんか、優男だけど、女にはモテそうな感じ。少し短めの黒髪はちゃんとセットされてて、黒に控えめなストライプのスーツが無駄に長い足を引き立ててて、ヤな感じ。俺なんか、お前の、すみませーん、水瀬様、いらっしゃいますかー、のドンドンドンドンドンって音と、うっせえな！っていう隣人の壁キックで目が覚めたっていうのに。おかげさまで俺は、髪の毛ボサボサ、スーツどころかよれよれのジャージですけど、っていう。

「わたしの顔に、何か？」

「...いや、別に。ただ...。」

「ただ？」

あんたみたいな胡散臭い営業マンが、なんでうちみたいなボロアパートに来るわけ？俺んちの郵便受けなんて風俗のチラシとかばっかで壊れてっし今時インターホンもなくて、（そうそう、

お隣に挨拶するときコンコン、初めまして、隣に引っ越してきた水瀬ですけど、ってあれすっげえ恥ずかしかつたんだっけ...) しかも木製の扉で、とてもじゃないけどあんたみたいな営業マンが来るとこじゃないんだけど。しかもワケわかんないことばっかゆってるし。単純な押し売り販売ではないとしても宗教みたいな勧誘はマジ勘弁だしなによりあんたの携帯に電話をかけることもましてやメールをすることも俺には絶対無い話だし。今にもそう言葉にしまいそうなのソレ...、言い出しそうな喉をおさえて、ぐっとソレを呑み込んで、もう一度男を見る。やたらと身なりのいい男は笑顔を浮かべたまま、未だに俺に向かって名刺を差し出している。俺は躊躇った。どうしたらいいんだ、こういうときは。新手の悪質営業(っぽい)からやっぱり即座に追い返した方がいいんだろーか。でも名刺、差し出してるし受け取った方が、ああ、でも、受け取ったら終わりか。ここで俺はコイツの罠にはまることになるのか、俗に言う詐欺っていうかそういう...

「特にご質問がなければ、早速、水瀬様の遺言を確認させて頂きたいのですが...。」

そうそう例えば、死亡日とか指定されて俺の今後の人生は滅茶苦茶になるんだ。借金取りに追い回されて定職に就くこともなくフリーター、いやニート、で親の脛をかじりながら、それでもいつか追い出されてギャンブルで生きるか死ぬかの生活をして嫁を貰うこともなくきっと誰も知らず俺は誰も読んでくれる奴もいないのにきっと遺言だけだから便箋30枚くらい書いて書きながら泣いて、そんでマジでその3日後くらいに死んで、...死んで、って、え？

「え、何、何つった、お前、今。」

「ですから、水瀬様ご希望の遺言をお伺いしたく。」

「.....は？」

俺、今、どんな顔してる？ とりあえず、思い浮かんだのは、もし歯でも磨いてたら間違いなく歯ブラシごとこいつの顔面に直撃させるくらいの勢いで、俺は唾を吹いた。もちろん、その男の顔に。真っ正面に。すげー爽やかな顔して笑ってるその顔のど真ん中に。効果音なら、ブーツ、て感じ？汚ねえけど。汚ねえとかじゃない。俺のそんな可愛らしいギャグよりもこいつは今もっとすげえ事言ったぞ。普通に生きてたら滅多にゆわねえこと言った...と思うんだけど、え、気のせいじゃねえよな？

「...あ、スンマセン...。」

「いえ、大丈夫です。」

「いや、あのタオル持ってくるんで...。」

でもあんまりにもそいつが冷静だったもんで俺もゆわれたこととかよりも先に謝ってた。でもあんたのその顔、大丈夫とかいって全く顔笑ってねえけどね。けど豪快に唾吐いた俺がそんなこ

と言えるはずもなく、俺は男の顔を見ないようにして振り返った。ごっちゃになった部屋は大したモンが無くて、でもかろうじて昨日コインランドリーに行ったおかげであった。拭くもの。「...すげえ申し訳ないんですけど、これで拭いてもらっていいッスか。ハンカチとかタオルとか...ちょっと、無いんで。」

「はあ。お気遣い恐れ入ります。」

俺の手から赤いソレを受け取ったときに見えた男の顔は笑ってなかったけど、俺は敢えて無視した。こんな時に相手の顔なんて、見れるかそんなもん。っていうかちょっとマジでこいつさっき俺になんて言った？俺の聞き間違いじゃなかったら、確か...

「でしたら再度申し訳ございませんが、水瀬様ご希望の遺言をお伺いしたく...。」

遺言、すいません、遺言って何ですか？俺がもっかいそれを聞き直そうとしたら、すげえ笑顔のそいつがいた。うん、なんかすげー嫌な予感がする。マジで嫌な予感がする。死にはしねえけど、きっとそれに値するくらいの嫌な予感がする。他人の恐ろしいくらい綺麗な笑顔ってのは、ろくなもんを連れてこない。俺の本能的なもんがそう言ってる。言ってん、だけど。体が動かねえんだよな、こういう時だけ人間って、変なことに。

「よろしいですか？」

...よろしいわけねえんだけど、俺の吐いた唾を丁寧にふき取った俺のパジャマの赤Tシャツを丁寧に返されて、俺は思わず笑ってしまった。冷や汗と一緒に。もちろんその赤シャツの中に巧妙に名詞が挟み込まれてたことなんて、俺が気づく余地はない。

「.....あの。新手の勧誘なら帰ってもらえねーですか。」

「勧誘、といえば勧誘になるのでしょうか。」

「いや、俺が聞きたいから、その辺は。」

いつの間にか俺の汚い部屋に上がり込んで、御堂と名乗ったその男は呑気にコーヒーを飲んでた。俺ですら何処にあるか知らなかったそれを、台所の戸棚を器用に開けた男は、「使ってもよろしいですか？」と俺に笑顔を向けて言い、俺は御堂になにを言う気力もなく「.....どうぞ。」と手を振った。いいコーヒーですね、水瀬様の趣味ですか？なんて抜かすので、客人の顔に唾を飛ばした挙げ句、拭くものと言って赤パジャマを差し出した俺が飲むようなコーヒーに見えるか、と嫌味の一つでも言ってやろうかと思ったが、やめた。俺の姿を見てそんなことを言うくらいだから、何を言っても無駄な気がした。

「...彼女の趣味だよ。」

「え？」

「俺の彼女、珈琲には煩えの。俺にはぜんっぜんわかんねーけど。」

「そうなんですか。水瀬様は素敵な彼女をお持ちですね。」

「.....」

とりあえずそんなことより早く帰れよと言ってやりたいが、御堂は部屋の真ん中、ガラステーブルの前で珈琲を啜ってて動きそうもない。俺はといえば、俺はベッドの上で御堂を眺めていた。御堂が床に座ってるのが奇跡なんだよ。衣服と雑誌とゴミと教科書とカップラーメンの残骸と...まあ、色々諸々が散らばってるこの部屋で、俺ですらもう床に座ろうとは思えないこの部屋で（美晴には既に掃除するまで部屋には入らない！と言われてます）悪く言えばよくもまあこのゴミ部屋の中でコーヒーなんか優雅に飲めるもんだよ。よかったな美晴、お前のコーヒーはゴミだめの魔力にすら勝ったぞ。まあ、俺自身は勝てなくて全然いいけど。

「...それで、あの、あんたはコーヒー飲んだら帰ってくれるわけ？」

「いえまさか、そんな。」

そこは流されて「はい。」って言えよ。流れに流されそうでさらっと否定した御堂を、気づかれないように睨み付ける。...せっかくコインランドリーで洗濯したのに、こいつまた洗濯かよ、他人の顔拭いた奴なんてさすがに着れねえしなーでも捨てるの勿体ねえしなーなんて、御堂に返された赤Tシャツを目の前にぶら下げる。まあ、でも今大事なのは赤シャツを洗濯に出すかどうかよりも、この御堂って男をいかに追い返すかだろう。いつまでもこの部屋でコーヒー飲ますわけにも、だからといってこいつに俺の遺言を言うわけにもいかない（そもそも俺は未だ死ぬつも

りもないしあの話信用した訳じゃない。決して。) っのに。...つーか、今、マイ赤シャツの隙間から落ちた小さい長方形のこれって、さ。

「.....なあ、御堂さん。」

「はい？」

「さっきの話、もっかい聞かせてくんね？ちょっと俺、まだ意味わかってねーし。」

言いながら、俺はベッドに座った。畜生、巧妙に名刺受け取らせやがって。こうなると話を聞かなきゃいけない気になってくる。俺にしてみれば、赤の他人に自己紹介した人間は無防備な気がして、俺も無碍に出来なくなる。全く、損な性格だ。勿論で御座います、と俺の方に向き直った御堂って奴は、さっきからずっとにやにやしたままで、俺にはそれが不思議だった。営業マンってのはこんなにずっと笑われるもんなのか？いや、営業だからそりゃ愛想笑いってのはしなきゃなんねーんだらうけど、何かコイツのはそういう愛想笑い、とはちょっと違う気がするんだよな。何処がどう、って訳じゃなくて、上手く言えねえけど、愛想笑い？って言われると、「ん？」って言う。なんか違和感がある。

「私、株式会社アンミンの御堂と申します。」

「聞いた。」

「名刺はお渡ししましたか？」

「.....不本意ながらもらったよ。」

「携帯番号、書いてありますでしょうか？」

「あるよ。ついでにあんたメールは出来ないんだろ。」

「そうです。よく覚えておいでで。」

「...携帯持ってんのにそんな時代錯誤な人間が珍しいんだよ。」

「それでこちらが本題なのですが、水瀬様の遺言をお伺いしに。」

「聞けよ、人の話を！」

「.....メールは人の感情まで伝えるのは難しいでしょう？」

「.....そうか？」

メールを使わないお前には解らないかもしれねえが、最早今の時代、メールにも絵文字やらデコ絵文字なんてもんが存在するんだぞ。美晴のメールにはいつもくっついてくるよ、そのデコメってやつが。泣いたり笑ったり落ち込んだりする、動くアレはすげー的確にそいつの気持ちを表してると思うけどな。ああでも無言メールに勝る表現のメールは無いな、俺の中で。...まあ、そのデコメってのはそれくらい人の感情を十分に伝えるシロモノだから、御堂さん、あんたのゆうそんな理屈は通らないと思うんだけどな、俺は。まあでもそのデコメにも欠点てのはあって、そのたび俺の古い携帯じゃすぐに容量がいっぱいになって受信できなくなるからその伝わるはずの感情って奴も虚しく消える...ってそんなこたあどうでもいい。そのデコ絵文字のことをこの目の前の男に説明すべきかどうか迷ったが、俺は黙っていた。メールを使わない奴にメールの説明を

するほど時間の無駄もない（そう、デコメを使わない俺がデコメの説明をするくらい時間の無駄だ）

「まあ、その話はさておき。」

「ああ、それは俺も同感だ。」

「水瀬様は死にたくないのですか？」

「は？」

「夢がないのに、生きてる価値なんてありますか？」

「.....はあ？」

御堂が何を言ってるか理解できなくて、俺は一瞬相当間抜けな顔になっていたと思う。御堂とはと言えば至極真面目な顔で俺を見ていて、俺は一瞬その表情にあっけにとられて...、すぐに言われた発言に苛立ちを覚えてベッドから立ち上がった。古いベッドがギシギシ音を立てたが、気にしない。こいつの今の発言は許せねえだろさすがに。”夢がないのに、生きてる価値なんてありますか？”なんて、どんな面下げて他人に言える台詞だ。ぎしり、とベッドを踏む一步に力が入る。すぐに殴りかかる勢いはなかった。瞬間に沸き上がる怒りよりも、あとから沸いてきた怒りの方が完全に勝っていた。”夢がない”から”生きてる価値がない”なら、この世の中のどんくらいの人間が既に死んでるんだらうなあ。昼間の街を歩いても死んだ魚みたいな眼をして歩いてる奴はいっぱいいるよ。死んだ魚の死骸を持って異臭を放ちながら歩いている馬鹿どももいる。そんなのと一緒にされたら、たまったもんじゃねーんだ、こっちは。俺は未だ魚の死骸を背負うほど悪趣味になった覚えはない。

「おいお前、おとなしく聞いてりゃ勝手なこと.....。」

「あ、すみません、言い方が悪かったでしょうか？」

立ち上がって今すぐにでも殴ってやろうと御堂に声をかけると、御堂は俺の怒りを察したのかそうでないのか、ただ単に鈍いのか挑発してるのか、相変わらず呑気な声を出した。手元に珈琲の入ったカップを持ったまま、座って俺を見上げている。俺とは言えば、黙って御堂を見下ろしていた。一瞬だけ御堂と目があって、目があった瞬間に、俺の顔が相当怒っていたのか、御堂は深々と俺に頭を下げた。そして、すみません、ともう一度言った。決して水瀬様を不快にさせようとして言った事ではないのですが、申し訳御座いません。私の配慮が足りませんでした。不躰な言葉ばかり並べてしまったことにはお詫びいたします。ですが水瀬様は私よりも余程の才能をお持ちなのに、それを使ってらっしゃらない。だからてっきり、私は水瀬様が「掟」に従うと思ったのです。どうぞ軽率な発言をしたことをお許し下さい。.....貴方が羨ましくてつい、あのような言い方を。深々と頭を下げたあとで、御堂はすらすらとそうしゃべって、再び俺と視線をあわせた。俺とは言えば。

「.....なんだ、お前。何言ってんの？」

謝ってんのは解ってるけど何言ってんの？そのまま素直に口に出し、今度は俺じゃなく御堂があっけにとられた顔をする番だった。俺を見て、部屋を（とてつもなく散らかってるこのとんでもねえ部屋を）じっくりと見渡して、手元の珈琲をじっと見つめて、ゆっくりそれを啜って、奴は驚いたように言った。

「……貴方は、夢を喰わないのですか？」